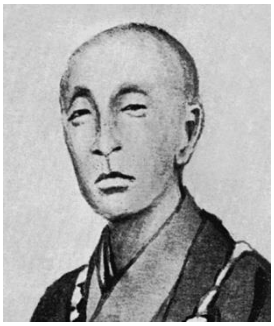
おびひろの沿革

帯広伏古コタンの家屋

蝦夷地（今の北海道）では、先住民族のアイヌの人たちが川沿いに集落をつくり、狩猟、採集、交易を中心に自然と共生する独自の文化を築いていました。帯広の語源は、アイヌの人たちがこの地を“オペレペレケプ”（河口がいくつにも分かれている川）と呼んでいたものが転訛(てんか)したものと言われています。



北海道の名付け親・松浦武四郎と探検調査記録の「十勝日誌」

江戸時代の初期、アイヌと交易を行うため十勝場所が設けられ、幕末には、それまでの松前藩の支配から、幕府の直接支配となりました。この時期、次第に蝦夷地の調査が進められるようになり、探検家で「北海道」の名付け親でもある松浦武四郎が、「十勝日誌」など探検調査記録を残したことで、十勝川流域の原野が肥沃(ひよく)で農業適地であることが広く知られるようになりました。

開拓の祖・依田勉三

明治2年、明治政府は蝦夷地を北海道と改め、開拓使を設け、十勝場所は７郡からなる十勝国となりました。北海道の多くの地域が官主導の北方の警備と開拓を担う屯田兵による開拓であったのに対し、帯広の本格的な開拓は、明治16年、開拓の先駆者である依田勉三翁が、静岡県西伊豆の松崎町から民間開拓団体・晩成社の一行27名を率いて入植したことが始まりです。その後、富山、岐阜など全国各地からの入植者により、十勝・帯広の開拓が進められてきました。

明治38年 鉄道開通、一番列車帯広停車場に着く

明治19年、明治政府は北海道庁を設置し、明治26年にアメリカ合衆国から学んだ殖民地区画制を基に、格子状の市街地区画を設計し、現在の都市計画の原型となりました。その後、当時下帯広村と呼ばれた帯広に河西外二郡各村戸長役場が置かれ、明治35年の二級町村制により十勝で唯一の町となりました。

そして明治40年までに、釧路、旭川までの鉄道が敷設され、十勝の農産物集散市場として産業・経済はもとより、教育文化などの機能充実と共に発展を続け、大正4年に一級町村制が施行されました。

昭和32年 合併記念パレード

大正時代には農業を基盤とする地域社会が確立し、その後、昭和8年に道内7番目の市となり、昭和32年、川西・大正両村と合併し、わが国を代表する大規模農業地帯の中心都市として発展を続けています。

昭和34年、全国に先駆けて総合計画を策定して以来、都市基盤・住環境の整備を進めるとともに、緑の工場公園として工業団地造成、帯広の森構想などの事業に着手し、昭和53年には、人口15万人に達しました。

昭和56年、新帯広空港の開港、国鉄石勝線の開業など、広域交通体系の整備が相次ぎました。昭和57年には開基100年市制施行50年を迎え、21世紀のまちづくりを展望する開拓2世紀に踏み出しました。

昭和56年 新帯広空港開港

平成8年 駅南北の利便性が増した鉄道高架

平成5年には、地方拠点都市整備法に基づく第1次指定地域として帯広市ほか音更町、芽室町、幕別町が帯広圏として指定され、平成8年には待望の鉄道高架が開通しました。

平成19年、これまで帯広、旭川、北見、岩見沢の4都市で開催していた「ばんえい競馬」は、帯広市単独の「ばんえい十勝」として新たにスタートしました。平成21年、国内2例目となる屋内スピードスケート場、「明治北海道十勝オーバル」がオープンしました。

平成22年には「人と環境にやさしい 活力ある 田園都市 おびひろ」の実現を目指し、本市の今後10年間のまちづくりの指針となる第六期帯広市総合計画を策定。平成23年、「十勝定住自立圏」形成協定を締結するとともに、「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」に指定され、平成24年には開拓130年市制施行80年を迎え、記念事業として市民ハーフマラソン「2012フードバレーとかちマラソン」を開催。

平成25年、帯広市と十勝18町村は、国の「バイオマス産業都市」に、全国で第1号として選定されました。

平成24年 第1回目のフードバレーとかちマラソン

平成30年 バスターミナルおびくる供用開始

平成26年には、地方版成長戦略とも呼ばれる「地域活性化モデルケース」に帯広市の提案が選ばれました。平成28年、大規模な災害や救急需要の増加などに対応するため、十勝19市町村が共同で消防業務を行う「とかち広域消防局」の運用を開始しました。また、十勝18町村と一丸となって更なる飛躍を目指し、第2期十勝定住自立圏共生ビジョンを策定しました。

平成29年、とかち帯広空港に新旅客ターミナルビルが完成し、国内線と国際線の供用が可能となりました（令和元年に旅客数2000万人に到達）。

平成30年、帯広駅バスターミナルが建て替えられ、バス待合所だけでなく観光情報発信拠点として生まれ変わりました。

令和2年には、活力ある地域社会の実現を目指して「あおあお ひろびろ いきいき 未来を信じる 帯広」を将来のまちの姿とした第七期帯広市総合計画を策定しました。

令和3年、とかち帯広空港は、北海道内７空港（新千歳・稚内・釧路・函館・旭川・女満別・帯広）の一括運営委託事業の受託者「北海道エアポート株式会社」による運営を開始しました。

令和4年には開拓140年市制施行90年を迎え、記念事業として百年記念館での企画展などを実施しました。また、大空地区に大空小学校と大空中学校を統合した、大空学園義務教育学校が開校しました。

令和5年には全国高校総体が36年ぶりに北海道で開催され、帯広市では、女子サッカー、剣道、アーチェリーの大会が行われました。

令和6年、国内で35カ所目の国立公園として「日高山脈襟裳十勝国立公園」が指定されました。

令和4年4月 大空学園義務教育学校開校